

一茶全集

第5卷 紀行・日記／俳文拾遺／
自筆句集／連句／俳諧歌

丸山一彦 小林計一郎校注

一茶全集／第五卷

紀行・日記／俳文拾遺／自
筆句集／連句／俳諧歌

昭和五十三年十一月三十日発行

校注 丸山 一彦
小林 計一郎

編集 信濃教育会
長野市旭町

発行所 信濃毎日新聞社

長野市南県町六五七
電話(〇五五)四三三
振替 長野 二二〇

印刷 信毎書籍印刷株式会社
長野市西和田四七〇

定価 五三〇〇円



『父の終焉日記』別記の一節



俳文
「茨の花」

[illegible]

此の洞きの跡に居るといふものなりとの言を
 中へ一ふせむを月を以て 雜夷 膳
 一七日墓詣

陽曆九月十七日
陰曆五月十七日
癸亥年五月十七日
癸亥年五月十七日

一茶
 り水の遠くへぬきぬき
 ちいさな畑を歩いた
 ひろくやうきやうき
 雨と風とくさくさ
 金

一歲旦。三雞六蝶八板九子。十學。
十一梅。十四萬紫。十五三月。茶。梨花長開。
十六。鍾。十七。天。風。十八。陽。雄。十九。衣。
廿。三。雲。辰。崇。主。廿四。有。子。廿五。正。月。落。月。廿六。子。衣。
廿七。蓮。苗。代。廿八。春。五。廿九。春。月。出。暮。入。
卅。留。力。銀。木。月。卅一。離。山。銀。廿。日。桃。
廿三。月。柳。接。廿四。日。天。衣。衣。衣。衣。
卅五。山。曉。松。苗。壽。山。曉。雪。山。笑。友。三。月。衣。
廿六。雞。此。

(二)

歳旦
春立十世の鬼の一里塚
座の元も折し神あり石の春
落茶の力りぬきくしみ春
より下西かろ石田むと
カキ年ゆて名入
なり

あきときを家へ入り春
おつさうと春は来ずる浅草堂
新法陣にちがひえわてなりの春
山寺・元月

玉の蔵
まづ空ふすた
ものみけの竹枝
あらねど

落月照るうらと雲霞を提
 りのふらふらと秋風うら
 けくそ秋や新阿の石のそとて
 乳波あくみくハ秋の天の子
 雲霞とそとぬらうと雲霞と
 みほ乃路とハふとこりこ
 へ向ける所とそと乃社
 梅乃路れのそとくそと

一茶 九 宇 負 茶 宇 九

文化七年四月廿七日

雪月を死まで日月のちとれ
 既り牡丹の花れ世の中
 花の所々とて都をよませ
 俗理とて人をも返さく
 休切ふのそとぬらうと
 ぬと所々とのそとぬらう
 織友の情をよみきりつ
 細りくそとぬらうと

一茶 負 茶 宇 九 宇 負 茶 宇 九

初雪の巻
 初雪や其の
 垢の月か
 一市
 舞
 御
 人

俳諧歌

時ぞの老木櫻花雪より日よ
閑まきも空のそら

車

とくひなけさるつとふ車の
下り坂なる家路の布

河老れく小首のそら
雲のゆくは老るる

無常

つと世のそらのはちの
ゆゑなきはさき

俳諧歌一首

第五卷

紀行・日記／俳文拾遺／自筆句集／連句／俳諧歌

目次

解 説	五
凡 例	九
紀行・日記	二
寛政三年紀行	三
西国紀行	三
父の終焉日記	六
俳文拾遺	二五

自筆句集	一五二
------	-----

一茶自筆句集	一五三
--------	-----

連句	一五五
----	-----

俳諧歌	一五三
-----	-----

索引	一五三
----	-----

発句索引	一五五
------	-----

連句索引	一五七
------	-----

解 説

本全集の第五巻として、紀行・日記、俳文拾遺、自筆句集、連句、俳諧歌を収めた。初めに、これらの各編についてその概要を説明しておく。

紀行・日記

本編には、断片的な紀行文やいわゆる旬日記の類は除き、まとまった作品として『寛政三年紀行』（一名『寛政三年帰郷日記』同年三月～四月）、『西国紀行』（一名『寛政紀行』同七年一月～四月）、『父の終焉日記』（一名『みとり日記』享和元年四月～五月）の三部を収めた。原本は無題で、ここに掲げた書名も仮題である。いずれも一茶自筆の稿本で、処々に改削の跡を残している。校訂に当たっては、その改削・推敲の箇所なども注記して、できるだけ原本の面影を伝えることに留意した。また、本文のほか余白書込などもすべて翻刻し、参考に供することとした。

これらは一茶の文章としては、いずれも比較的初期のものに属し、『寛政三年紀行』は先人を模倣した生硬な文体であり、『父の終焉日記』は、その人間臭に一茶らしい特色が出ているが、多分に誇張や偏執に満ちた圭角の多い文章である。これを晩年の円熟期を示す『おらが春』（第六巻所収）などの軽妙自在な文章と読み比べてみるとよい。

俳文拾遺

一茶の文集として最もよく整っているのは、伊藤正雄氏の『解註一茶文集』（昭和十八年刊）である。古典俳文学大系『一茶集』（昭和四十五年刊）所収の俳文編（小林計一郎）はそれを増補したものである。本編は後者を基にし、本全集所収の諸書に含まれている文を除き、最近発見の『文化十年句文集』（仮題）などの新資料に含まれる文を付け加えたものである。

一茶の俳文は題のないものが大部分であるが、『解註一茶文集』にならって、仮に題をつけた。原文に題のある場合は（原題）と注記した。

自筆句集

一茶晩年の自筆句集を収めた。季題によって句を集めたものである。春と冬の二巻のみで、夏・秋を欠く。筆跡及び内容から、文政八年末ころ書かれたものと考えられる。もと浅野の西原文虎の家に伝わったものが柏原の中村家、善光寺威徳院を経て、現在善光寺教授院に所蔵されている。一茶自撰・自筆の発句集として貴重である。

連句

一茶の連句を集めたものとしては、勝峰晋風編「一茶連句集成」（日本俳書大系『一茶一代集』所収、昭和二年刊）があり、これに一茶の一座した連句一七八巻を収めている。さらに古典俳文学大系『一茶集』（昭和四十五年刊、集英社）の連句編（丸山一彦編）には、その後の新出資料を加えて二〇六巻を集録したが、紙幅の関係で文政期の作品の一部を割愛してある。本全集ではそれらを補足し、その後発見されたものを加え、また誤りを訂し、新たに編集したもので二五〇巻を収めた。